

## 巻 頭 言

# 2022年度を振り返って

会長 関田 一彦  
(創価大学教育学部学部長)

創価大学ではグランドデザインと呼ばれる大学建設の中長期計画が作成されている。直近では2021年に創立50周年を期して「Soka University Grand Design 2021-2030」が策定された。この計画に沿って大学は、2030年を目指し「価値創造を实践する世界市民」を輩出するための教育システムの整備を進め、教育全体を「価値創造教育プログラム」として体系化し、その教育効果を検証する仕組みをつくりながら、適切にプログラム評価できる人材の養成にも取り組もうとしている。いよいよ創価教育学を实践する大学として、その取り組みの真価を研究的・実践的視点から世界に問う時代に入ってきた。

こうした動きの中、本会名誉会員の木全力夫創価大学名誉教授（元教育学部長・教職大学院研究科長）が昨年11月17日、ご逝去された。81歳であった。生前、お世話になった会員の方も多であろう。筆者も公私ともにお世話になった一人である。学部生時代、社会教育演習では稲城市の公民館で開かれていた婦人学級の参与観察にお供させていただいた。アメリカ留学中は、折しもノースカロライナ州立大学に在外研究に来られていた木全先生のお宅にお邪魔し、ご家族とクリスマスの休日を過ごさせていただいた。創価大学に勤めてからは、折に触れ牧口先生の創価教育についてご指導いただいていた。本会のホームページから木全先生の玉稿のいくつかにアクセスできる。いずれも牧口教育学の今日的意義や展開について多くの示唆を与えてくれる、本会にとって貴重な資料である。もう少しお元気でいていただきたかった。本学の新たな取り組みを見守っていただきたかった。もっともっとご指導いただきたかった、というのが今の気持ちである。

残された仕事を継承し発展させ、あるいは宣揚するのは私たち残された者の役目である。「価値創造を实践する世界市民」を育てる教育を研究し、实践する者たちの集まりである創大教育学会の役割は明らかである。「いかなる困難にあっても価値の創造をやめない」人格の育成を目指す創価教育は、地球規模の課題が山積する中で持続可能な社会の創り手を育成しようとする日本の学校教育の要であり、中軸であることは論を俟たない。

今年度を振り返ると、まず4月にホームページのリニューアルが行われ、懸案であったセキュリティが大きく向上した。6月の定期総会に続く記念講演では「牧口常三郎は教師と子どもの関係をどのように考えたのか」と題した、岩木勇作先生（東洋哲学研究所委嘱研究員・創価大学非常勤講師）のお話を伺った。9月には教育研究奨励費の募集を行い、10件の研究に助成を行った。12月にはすでに恒例となった首都師範大学初等教育研究所との共催事業、「東ア

「アジア学校カリキュラムと教授法研究大会」を Web 開催した。本年 1 月には 21 回目の教育研究大会が開かれ、3 月には無事、本誌の発刊となった。このように着実に会の運営ができているのは運営委員の方々の尽力によるところが大きいですが、併せて学生や院生を含む多くの会員の皆様の積極的な参加に支えられているところである。大学の真価は卒業生によって決まる。本学出身の教育関係者の陣列をさらに広げ、創価の人間教育を世界に宣揚する流れを加速する一助となるために、新年度も会員の皆様共々、一層の取り組みを進めて参りたい。